

メディアスポーツとはどのような社会問題なのか？¹⁾

——「生活空間」のなかのメディアスポーツ——

橋本政晴 スポーツ科学教育講座

キーワード：メディアスポーツ，社会問題，生活空間

(居間の書棚から『黒い輪』を持ち出してきて)「長野五輪なんて単なる金の無駄遣いでしよう。これにもよ〜く書いてある。あんなに無駄に使えるのは五輪なんだからだろうね。[長野五輪の]会場だけじゃなくて、道路も新幹線もひっばってきて…。あんなのは五輪だからできるんだよ」。(その後、長野五輪のテレビ視聴について質問すると)「スケートの清水は凄かった。実は小っちゃいときにスケートをちょこっとやっていた、ちょうど[テレビ放送が]夜だったのもあって、それこそ釘づけになって見たよ。[あまりにも集中して視聴していたため]家のもんからは、あきれられたけどね。それでもやっぱり凄かったなあ。」「[長野五輪程バカ気たイベントは無い]」(『月刊はこべ』1994年6月号)の執筆者M氏への聞き取り調査から(1998年3月)²⁾

(長野五輪について尋ねると)「長野五輪はなんだったんだろう。あれほど北信では騒いでいたのに。う〜ん。『はこべ』にも反対意見が多かったのは覚えているけど、それから10年といってもなあ…。それにあまりテレビでも見なかったからなあ。正直、よく覚えていないだよなあ〜」。(1998年の聞き取り調査で話していただいたことについて問いかけると)「う〜ん。でもその時は、オリンピックのことだけでなく、ここ[松川町M地区]にもいろんなことがあったし、オレもりんごの剪定で忙しかった時期だからなあ。本当にそんなこと言ったっけ？今年が10周年といわれれば、ああそうなのかというのはあるけど、その時のことなんてよく覚えてないんだよ〜」。【同執筆者M氏への聞き取り調査から(2008年2月)】

はじめに

今日のスポーツ社会学においてメディアスポーツというテーマは、欠くことのできないテーマとなっている³⁾。それでは、なぜメディアスポーツ研究なのか。あるいは、メディアスポーツ研究の語り口はなにを問題として語ってきたのだろうか。本稿では、冒頭のM氏の語りを念頭におくことによ

¹⁾ 本稿は、『メガ・スポーツイベントの社会学 [改訂版]』[松村(編), 2006] を出発点とする「メガ・スポーツイベント研究会 (代表: 大沼良彦 (北海道大学))」の成果として位置づいている。また、第17回日本スポーツ社会学大会 [2008年3月 於: 中京大学] での一般報告およびフロアーからの質疑も参考にさせていただいている。学会報告における司会およびフロアーの方々に、記して感謝を申し上げたい。

²⁾ 橋本 [2002: 98] より。

³⁾ 例えば、1992年に第1回大会が開催された日本スポーツ社会学会のほぼ10年間の成果ともいえるテキスト『スポーツ文化を学ぶ人のために』にも、渡辺 [1999] による「スポーツとメディア」がおさめられているし、イギリスのスポーツ社会学者たちによるテキスト“Understanding Sport: An Introduction to the Sociological and Cultural Analysis of Sport” [Horne, Tomlinson & Whannel, 1999] にも「Representation, sport and the media」という章がもうけられている。また、わが国では1997年に『メディアスポーツ』[広瀬, 1997]、2001年に『メディアスポーツの視点』[神原, 2001]、2002年に『現代メディアスポーツ論』[橋本(編), 2002]、2007年には『スポーツニュースは怖い』[森田, 2007]が出版されている。

て、メディアスポーツがいかなる社会問題として語られてきたのかという「学問的な課題」の整理を試みつつ、その「現実的な課題」へとダウンストリームしていくことをねらいとしている。

『現代メディアスポーツ論』の編者である橋本は次のようにいう。「メディアスポーツは、人々のライフスタイルの創造と継承において、人々の統合と分裂において、また、政治的支配と解放をめぐる闘争において、さらには市場の形成と変容においてさえ、重要な意味と機能を有している」[2002: ii]。こうした問題意識は、現在のメディア研究とも通底している。例えば、文化社会学者の伊藤はメディア文化研究の意義を次のように説く。「テレビは、われわれの『生きられる世界』のリアリティを構築し、個人のアイデンティティの構成に決定的な効果を及ぼしている」[2002: 9]⁴⁾。メディアスポーツあるいはメディア文化は、今日の社会におけるリアリティを構成し、個々人のライフスタイルやアイデンティティにも影響力をおよぼしている。だからこそ、メディアスポーツやメディア文化を問題化し、その「社会的な力」のメカニズムを明るみにしなければならないのだと。

またイギリスのスポーツ社会学者たちは、スポーツそのものは本来非本質主義的なものであるにもかかわらず、スポーツ新聞やスポーツ欄、テレビスポーツによって、スポーツとは何かについて、メディアは継続的にその再編をおこなっているという [Horne et al.: 161]。われわれが意識的あるいは無意識的に「スポーツとは何か」について考える場合、今日ではメディアが圧倒的に重要な役割を果たしており、そこにはスポーツを通じた支配/従属という境界が暗黙のうちにひかれている。固定化され、格差化されたこうした線引きを内側から突破するためにも、単なるポピュラーカルチャーとしてではなく、ポピュラーカルチャーだからこそメディアスポーツを批判的に探求する意義があるのだと。

本稿では、これらの視点に学びつつも、「メディアスポーツを『社会問題化』することによって、なにかが見落とされてしまっているのではないか？」という問いを常に挿入させることによって、研究の今日的な課題を浮かび上がらせることを目的にしたい。冒頭に引用した聞き取り調査にみられる「生活空間のなかのメディアスポーツの位置づけ」⁵⁾を、どのように分析することができるのか。本稿を通して明らかにしてみたい。

1 文化政治学的メディア研究の語り口

カルチュラル・スタディーズの問題提起を真摯に受け止めてきた近年のメディア研究（例えば吉見 [2000, 2004] や伊藤 [2005] など）の成果を、敢えて一言で纏めることを許してもらえば、われわれのメディア/テキストをめぐる諸々の実践を、「抗争の場」というフィールド内での実践として位置づける、いわば「空間論的な視点」への転換にあるといえよう。

その鋭敏な文化社会学者である吉見は、テレビというメディア分析の課題を次のようにいう。テレビの人びとへの影響という社会的機能の検証でもなく、あるいは記号論を用いて映像テキストの一枚岩なイデオロギー性を暴き出すのでもなく、「特定の時間意識や記憶の構造に従って物語を表象し、重層的にせめぎあう諸主体の解釈の場となっていくテキスト（テレビ=番組）の相互に絡まりあったプロセス」[吉見, 2003: 45]を具体的かつ理論的に捉えなおすこと。メディア/テキストが制作され、

⁴⁾ ①メディア文化を正面から論じることに加えて、②メディア文化を権力装置として読み解くこと、③メディア装置の存立のモードを明らかにすること。以上の三点を同書のねらいとしている [伊藤, 2002]。

⁵⁾ 文化社会学者の長谷は、「暮らしのなかでテレビを見るという、私たち視聴者の側の『素』の状態を取り戻すこと」[2007: 24-25]こそが、テレビ文化研究の今日的な課題だという。本稿も、長谷にちかい立ち位置から、メディアスポーツ研究の課題を考えているのだが、長谷のいう「暮らし」あるいは「生活する身体」[佐藤ほか, 2007]が現在のあるいは共時的な概念であるのに対して、本稿でいう生活や生活空間とは、「人びとの暮らしの軌跡」[ブルデュー, 1988]、すなわち歴史的あるいは通時的な概念であるという違いがある。

編集され、視聴され、解釈されていく諸々のプロセス。これらの諸実践が相互に絡み合いながら「抗争の場」という社会空間が作りあげられていくという社会観のもと、それらのプロセスが権力、ジェンダー、人種、階級などにおける差異や不平等を内包しながら遂行されていくことによって、捩れや矛盾を内包する重層的な社会空間が作りあげられていることを社会問題化しようとしたのである。

(1) メディアスポーツ＝抗争の場

こうした文化政治学的メディア研究は、メディア／テキストをめぐる「抗争の場」というパースペクティヴを共有することを通して、何を成し遂げようとしてきたのか。それはまず、メディア研究の「政治言説化」[長谷, 2006]といえよう。「抗争の場」という社会空間は、日常生活における諸々のメディア実践によって作りあげられているのだが、これらの実践は、さまざまな差異や不平等を内包しつつ無意識的に遂行されている。よって、メディアをめぐる実践の政治性を、一方で社会問題化してきた。加えて、メディア研究それ自体の社会的な効果を自省し、メディア論が紡ぎだす言説を政治的な意義を担うものへと鍛え上げることも同時並行的に試みてきた。すなわち、メディアをめぐる政治性を徹底的に自覚化したことにある⁶⁾。

メディアスポーツもまさしく諸々の主体が社会的・政治的・文化的な利害をめぐる争われ、階級やジェンダー、人種、ネーションといった集合的なアイデンティティを編成していく、「社会的・政治的・経済的な文化アリーナ」だといわれる [Boyle & Haynes, 2000 : 161]。一方で、テレビ局やスポンサー企業、広告業界などが、市場経済のなかでスポーツをどのように位置づけてきたのか。メディアスポーツのテキスト、その制作を規定する制度、経済的な利害関係などがどのように絡み合い、いかなる布置のもとにメディアスポーツを定位させているのかといった、メディアスポーツの政治経済学 (例えば, Whannel [1992], 清水 [2004], 須藤 [2005] など) を展開することによって、メディアスポーツ研究の政治言説化が試みられてきた。他方では、1990年代以降の北米の *Sociology of Sports* 誌にみられるように、スポーツのテレビ番組や新聞記事、雑誌記事あるいは雑誌広告といったメディアテキストが内包する諸々のイデオロギーを明るみに出すことを通じて、メディアスポーツをめぐる数々の政治言説を紡ぎあげてきた (海外の蓄積については橋本 [2002] を参照)。例えば、シドニー五輪に関する新聞報道を分析した飯田は、メディアスポーツのテキストにおいては、男性ヘゲモニーのメカニズムが無意図的に達成されていくプロセスを明らかにし、「メディアの男性中心主義を暴き続け、メディアを作り発信する権力機構に女性たちを送りこむ努力を怠ってはならない」[2002 : 89] と強く主張している⁷⁾。あるいは、言説的な立場からメディアスポーツにおける「日本人種」言説を浮かび上がらせる試みもある [トンプソン, 2008]。

メディアスポーツの制作プロセスやそのテキストは、きわめて政治的なものであるということを徹底的に前景化させることを通じて、メディアスポーツ研究を (ひいてはスポーツ社会学という学問的探求をも) 政治言説化された語り、すなわち「メディアスポーツの文化政治学」を紡ぎだしてきた。

⁶⁾ こうした動きは「社会問題の社会学」と軌を一にもしている。すなわち、少年犯罪やイジメ、不登校、児童虐待、夫婦別姓などといった、いわゆる「社会的に」問題となっているようなトピックについて、マスメディアの報道内容や裁判記録、新聞への投書といった言説の分析を社会問題の社会学の主眼としている [山田・好井, 1998 ; 中河, 1999 ; 中河・北澤・土井, 2001]。カルチュラル・スタディーズと社会問題の社会学との共通する問題意識については、北田 [2001] を参照。同論考によると、両者は相当程度な違いを含みつつも、①アイデンティティ構成にかかわる「反本質主義」、②観察者の特権性の否定、③政治性の重視、という三つの視座を共有しているという。

⁷⁾ 阿部は、アトランタオリンピックにおける女性アスリートのディスコース分析を通じて、「『自律した女性』を肯定的に表象するディスコースと同時に、それを否定するような旧態依然の女性差別的ディスコースが、オリンピック女子マラソンを巡る『語り』には並存していた」[1999 : 122] と結論づけている。

(2) メディアスポーツに「呼びかけられる」主体

次いで、政治言説化と表裏の関係にもあることなのだが、メディアをめぐる「主体への回帰」[大杉, 1998]化があげられよう。吉見はメディアイベント研究の課題を、次のようにいう。「マスメディアによって主催され、媒介され、イベント化された近代日本のメディアイベントを、この国の人々はどのように受容していったのか。すなわち、マスメディア産業や国家、あるいは興行資本によるメディアイベントの演出を、どのような受け手のどのような実践がとりまいているのか」[1996: 28]。受け手の内実は明確にされてはいないものの、明らかにカルチュラル・スタディーズのオーディエンス研究(=主体分析)が念頭におかれている。次いで、個々の身体に無媒介に接続され、自己言及的な回路に閉ざされているわが国のグローバルかつネオ・ナショナリスティックな現在のメディア体制に対して、「こうした動きをやみくもに拒否するのではなく、変化の背後にある大きな歴史の潮流を見定め、より批判的でも表現的でもあるような実践の可能的な地平を切り拓いていく」[水越・吉見, 2003: 9]と宣言するとき、主体の内実がより明らかになっている。メディア/テキストあるいはメディアイベントに対して、政治的な自覚をもち、批判的に捉えることのみならず、その意思を何らかのメディアを通じて表現し、情報として発信していく主体が、「抗争の場」というフィールドで社会的・文化的な実践を成し遂げていくこと。すなわち、メディア研究を「政治言説化」してきた研究主体と志向を共有・共感する「政治的な主体」がそこには召還されている⁸⁾。

メディアスポーツ研究においても、メディアスポーツのテキスト(ここではスニーカーのテレビCF)解釈を通じて、黒人の若者たちが「主体的」に意味を紡ぎあげ、自らのライフスタイルやアイデンティティを獲得しているプロセスを明らかにしている研究がある[Willson & Sparks: 1996]。すなわち、メディア文化産業に無自覚に操られる主体ではなく、能動的にその意味を読み取り、自らの価値観や規範などと照らし合わせながら新たな意味を紡ぎ出していく主体が召喚されている。また、阿部はシドニー・オリンピックの南北合同行進の視聴後のグループ・ディスカッションについて、次のように纏めている。「テキストに対して、学生たちは多様な解説を加えていた。しかしながら、そうした『読みの実践』は一定の制約のなかで成立していたように思われる。…(略)…『民族』や『国家』への違和感と『日本人』への希求との結び付きのなかで、スポーツを通じた『ナショナルなもの』への欲望の高まりが見出された」[2001: 157]。すなわち、メディア・リテラシーの担い手たちは、一方で報道番組の伝え方に対する違和感をもちつつも、他方で「われわれ=日本人」意識においてはナショナルなものへの希求を無自覚にあらわしている。

このように、近年のメディア・リテラシーへの関心の高まりと相俟って⁹⁾、政治言説化されたメディアスポーツ研究は他方で、メディアスポーツのテキストが押し付けてくる意味を換骨奪胎し、能動的に意味を紡ぎ出していく主体が召喚されてきたのである。

2 メディアスポーツ研究が覆い隠してきたもの

人びとの生活のなかでのスポーツへのかかわりを、メディア/テキストを媒介にしたものへと社会問題化(=対象化)することは、一方で現在の社会におけるスポーツの在り様について考えるというスポーツ論的思考とも、あるいは、捩れや矛盾を孕みながらも重層的に立ち現われる社会空間のメ

⁸⁾ 政治学者の佐伯は、戦後の日本における「市民」概念を次のように纏めている。「『市民』とは、もっぱら、反政府的、反権力的な立場にたった、ある種の政治的自覚をもった個人、将来においてわれわれがめざすべきプラス・イメージの自画像なのである」[佐伯, 1997: 32-33]。そして、こうした市民概念を携えた市民社会論が今日の社会科学の主流となっている。吉見の文化政治学的メディア論も、こうした潮流と重なり合っていると筆者は考えている。

⁹⁾ メディア・リテラシーの実践と理論については、わが国における第一人者である鈴木[2001]を参照されたい。

カニズムを浮かび上がらせようとする社会空間論的な思考とも符合しやすい。しかし他方で、人びとの日常生活におけるスポーツとのかかわりを射程に組み込んで、スポーツ社会学を構想していこうとすると、メディアスポーツのみを対象として構成することによってどこか閉塞感をもってしまうのもまた事実ではないだろうか。メディアとスポーツとの関係において歴史的・社会的にどのような問題が生じてきたのか。人びとはなぜメディアスポーツに魅せられ、そしてそのことがどのように軋轢や矛盾を内包した社会空間を形づくってしまうのかといったように、メディアスポーツを対象として構成することには、一定程度の必要性を感じながらも、メディアスポーツを社会問題化することによって、何かが隠されてしまうのではないかという違和感をもってしまうのも事実といえよう。

この違和感を、浜 [2007] のいう「メディアのなかの社会／社会のなかのメディア」という切り口をもとにして考えてみたい。「メディアのなかの社会」とは、メディアによって媒介される相互行為があるところにかたちづくられる社会について、メディア論的な思考をめぐらす語り口のことである。例えば、インターネットによって媒介される相互行為からなる「インターネットのなかの社会」について論じるといったように（例えば、吉田 [2000] など）。

しかし浜は、メディアによって媒介された相互行為によって形成される社会をもって、現在の社会について語ることへの自省を求める。なぜなら、インターネットがかつてよりも頻繁に利用されているのが現代社会の特徴だとしても、家族や友人と会話を交わしたり、テレビやラジオ、新聞、本、雑誌といったものを見たり、聞いたり、読んだりもしている。よって、ともすると「インターネットのなかの社会」が、現実の社会そのものにとり間違えられる危険がある。そこで『インターネットのなかの社会』はその外側に広がる社会のなかに位置づけて論じる」[浜, ibid : 140] ことが重要になってくる。こうした語り口を浜は「社会のなかのメディア」と呼んでいる¹⁰⁾。

メディアスポーツ研究においてはどうかだろうか。メディアスポーツの政治言説化という試みは、メディアスポーツのなかに立ち現われる社会をア priori に措定することで、論拠の有効性を担保してきたのではないだろうか。すなわち、メディアスポーツを分析することを通じて、その分析から導き出された事象を、社会全体へと位置づけることを回避し、あたかもメディアスポーツというひとつの社会を描き出してきたのではないだろうか。私たちは確かに、日々、テレビや新聞といったマスメディアから特定のスポーツについての情報を受け取り、それでも足りなければインターネットから諸々の情報を受け取っている。よって、確かにメディアスポーツ研究の意義はここに見出される可能性もあるのだが、他方で、そのことによって多様でもあり、そして固有でもあるような諸々の人びとのスポーツ経験を後景化することにも貢献してしまうおそれがある。

諸々のメディアの飛躍的な技術開発と社会的な浸透によって、メディアに媒介された「地図にないコミュニティ」が出現していると説いたのはガンパート [1990] であるが、それでもなお、私たちは家族や地域といったコミュニティに足場をおきながら生活を営んでいるのではないだろうか。あるいは、メディアを介した「匿名性」の社会関係に飽き足らず、「顔のみえる人と人との関係性」[今関, 2003] を形成し、維持していくためのささやかな営みを生活のなかで取り結んできているのではないだろうか。メディアスポーツそのものを社会問題化する前に、「現実に展開されている住民の生活と我々がとりあげるスポーツ活動との関わり」[松村, 1978 : 65] を問うことの必要性が想起されよう。

¹⁰⁾ 「21世紀日本のネオ・コミュニティの展望」という座談会のなかで佐藤も、吉見らによる電話メディアの研究 [1992] に対して、同様の問題を指摘していた。「電話を最初に出しちゃうと、風俗における伝言ダイヤルとか、行政におけるニューメディア的な新語へのあせりなんかがないまぜになって、先端だけを強調した読み方が先行する。真ん中が抜けるような形で読む人のほうが多いだろうな」[蓮見ほか, 1993 : 269]。

3 メディアスポーツ研究に「呼びかけられる」主体

メディアスポーツ研究において「呼びかけられた」主体についてはどうだろうか。確かにカルチュラル・スタディーズの問題提起を受け止めることで、メディアスポーツのオーディエンス研究がとりわけ重要であることは否めない。自己言及的にメディアのグローバル化が推し進められ、以前にもまして巧みなメディア操作〔渡辺, 1985〕によって社会的な事象が歪曲化されているおそれがある現代社会においては、メディア・リテラシーを携えた批判的なメディア実践が求められていることもまた時代の要請でもあろう。メディアスポーツのオーディエンス研究（あるいはオーディエンス研究そのもの〔毛利, 2003〕）が教えてくれているのは、視聴体験の多様性であり、読み解かれた意味の多様性である。しかしながら、ここで想定されている主体とは、まさに匿名性の社会関係のなかで「個別化」された一人ひとりのオーディエンスなのである。

今日までのメディアの発達史をどのように位置づけるかは、研究者の目論見によってさまざまなのだが、「共同体の想像のスタイルが、親族関係や主従関係などの具体的な人と人との関係の網の目として創造されるスタイルから、個人と明確に境界づけられた全体とを無媒介に結びつけるスタイルへの変化」〔小田, 2001: 28〕として考えることもできるだろう。すなわち、メディアとは媒介作用〔シルバーストーン, 2003: 57〕なのであるが、この時点でメディアに「呼びかけ」られているのは、バラバラに分断された諸個人であるということも忘れてはならない¹¹⁾。

こうした個別化への動きは、何もメディアとのかかわりのなかでのみ達成されてきたわけではなく、戦後わが国の社会における大きな流れでもある。地域社会学の成果が教えてくれているのは、全体としては生活が個別化へと向かいながらも、その一方で個々の生活者の生活を守るために、そして共同の生活を維持していくために、できる限りの様々な「共同の工夫」を地域の生活者たちは実践してきたということである〔松岡, 1994〕¹²⁾。そうした「共同の工夫」が営まれているなかに、メディアスポーツを位置づけてみることは、メディアスポーツを別の角度から社会問題化してくれるのではないだろうか。

メディアスポーツの支配的な価値やイデオロギーの押しつけに抗するためにも、またメディアスポーツのあり方をより豊かなものにするためにも、批判的にその意味を読み替え、独自に表現する能動的な主体は確かに魅力ではある。そうした動きの延長に、スポーツ関係者・メディア・スポンサー・観戦者・視聴者からなる「メディアスポーツ検討委員会」なるものを組織化することもまた求められるのかもしれない〔鬼丸, 2006〕。しかしながら、そこに召喚されている人びとが、匿名化、個別化された諸個人を前提にしているがゆえに、全体へと無媒介に結びつけられることで、その効力は失われてしまうおそれがある。

メディアスポーツに「呼びかけ」られる主体を、無自覚なままに諸個人へと特定化するまえに、「共同の工夫」が営まれている生活の場へと、研究者自身が「社会的に瘦身」〔松村, 1995〕することで、

¹¹⁾ 文化社会学者の中江は、「楽しみの経験は個々人の心のなかでのみそんざいしており、誰も共有できないものであるために、〈楽しみ〉エートスの社会とは、じつは人と人とを分断しがちである」〔2005: 70〕と、同様のメカニズムを別の視角から指摘しつつも、次のように議論を一步すすめている。「そのようななかでこそ、テレビから流れ出す効率的〈楽しみ〉は、経済的意味以上の意味を再浮上させる。…（略）…ばらばらになるからこそ余計に、薄いつながりであれ、社会らしきものとのつながりを想像させるが決して教訓を垂れることもなく糾弾することもなく、私の世界を侵害される心配のない物語消費が求められる。テレビの分かり易い単純な〈楽しみ〉はそれに応える」〔中江, 2005: ibid〕と。

¹²⁾ 先の中江は、ボランティア、NPO、スローライフ、手作りの趣味サークルなどといった近年の身体的経験的な〈楽しみ〉の動きを、次のように読み解いている。「個人は集団をもってその生命の存在を支えられているという、

社会というものの最も素朴な体験を、意識的に再確認しようとしなければ、どこかわからない場所へと足元からさらわれてしまう。そんな無言の危機感がここにあらわれているように思われる」〔中江, 2005: 71〕。

メディアスポーツをめぐる問題を再構成する必要があるのではないだろうか¹³⁾。

むすびにかえて——「生活空間」からメディアスポーツを問い直す

メディアスポーツ研究は、その対象を構成する時点ですでに「全体社会」と「個別化」という思考スタイルを密輸入してきた。この暗黙のうちに投入された「全体社会」という認識の枠組みこそが、若林 [2007] に倣っていえば「メディアスポーツの罫」となり、人びとの生活のなかでのスポーツへのかかわりを矮小化してしまっている。メディアスポーツを包括的に社会問題化しようとした『現代メディアスポーツ論』[橋本, 2002] を紐解いてみても、メディアとスポーツとの関係性がア priori に指定されていることをもって、全体性を志向していることがうかがわれよう。そのことが人びとの生活のなかでのスポーツへのかかわりという具体的、現実的な姿や営みを後景化してしまい、メディアスポーツへのかかわり方へと自閉した思考スタイルをうみだしている。あるいは吉見らによる文化政治学的メディア論の空間論的転回においても、「政治言説」化に真摯に向き合うがゆえに、「全体社会」という枠組みを密輸入してしまっているのかもしれない。

さらには、この全体社会に無媒介に結びつけられる分断された諸個人をオーディエンスとして位置づけることによって、能動的に意味を読み取る姿は呈示できたものの、反権力的な立場にたち、批判的にメディアスポーツを読み解く個人を、求められる主体像の最前線に位置づけてしまった。家族や地域といった「共同の生活」を営み続けてきた生活者たちに対して、分断され、個別化されたオーディエンスというメディアスポーツ研究が求める枠組みを投影することによって、まさに生活のなかにメディアスポーツを位置づけることの意味が狭められてしまった。

冒頭の聞き取り調査に立ち返ると、M氏は「オーディエンス」として括られ、メディアスポーツという全体社会へと無媒介に結びつけられることも無意図的に否定している。そして、長野オリンピックに反対の疑義を唱えたのは、一個人としてではなく、ミニコミ誌の配布先である地域社会のメンバーとして疑義を唱えたのではないだろうか¹⁴⁾。M氏をオーディエンスとしてではなく、「生活する主体」として、さらには「地域の共同生活を営み続けてきた生活者」として考えることからこそ、メディアスポーツ研究は出発するべきであるように思う¹⁵⁾。それは、「心の軌跡」[村田・松村, 2007] からメディアスポーツを社会問題化することにほかならない。

【引用参考文献】

阿部潔, 1999, 「オリンピック女子マラソンは『何を語ったか』」, 伊藤守・藤田真文(編), 『テレビジョン・ポリフォニー——番組・視聴者分析の試み』, 世界思想社, 108-130.

——, 2001, 「シドニー・オリンピック『南北合同行進』の伝えられ方/視られ方——グループ・ディスカッションから見え

¹³⁾ 「生活論の立場は、もはやいうまでもなく『共同行為論』の立場、『社会学的介入』の立場とは相いれない。双方の立場とも生活者の『過去』を引き受けず、現在と未来における共時的『対話』を重視する立場である。生活論の立場は、過去とも対話する生活者を引き受けるのであり、彼らの『身体』のありように過去を読みとり交信する」[松村, 1995: 446]。そして、「『場』に自らを投じる(調査の実施)ということ自体が調査者の『身体』の変容を要請し、それを体感する調査者はすでに『見取図』を書き換えているのである。この事をその『場』が教えるのであり、『調査者を客観化する』視角を社会学に要請する」[松村, 1995: 446-447]。

¹⁴⁾ M氏の居住する地域社会のメンバーが、長野オリンピックに対してどのような意見や主張をしてきたのかについては、巻末の資料を参照されたい。

¹⁵⁾ メディアスポーツを、「行政・自治体の立場」から位置づけた場合については、次の発言が参考になるだろう。長野オリンピック 10 周年記念事業実行委員会が主催した『長野オリンピック・パラリンピック 10 周年記念 スポーツとまちづくりシンポジウム』[2008 年 2 月 17 日 於: 若里市民文化ホール]において、長野市副市長は「主催者あいさつ」のなかで、10 年を経た長野市民にとってのオリンピックの「遺産」は、①インフラの整備・充実、②ボランティア団体の発生と活動の継続とした。こうした行政・自治体の視点から位置づけられたメディアスポーツ像を、「生活者の視点」に関係づけることも重要な作業である。

- てくるもの」, 鈴木みどり(編), 『メディア・リテラシーの現在と未来』, 世界思想社, 140-157.
- ブルデュー, ピエール/今村仁司・港道隆(訳), 「時間の働き」, 『実践感覚 1』, みすず書房, 162-184.
- Boyle, Raymond & Richard Haynes, 2000, "Power Play: Sport, the Media & Popular Culture", Longman.
- ガンパート, ゲーリィ/石丸正(訳), 1990, 『メディアの時代』, 新潮社.
- 浜日出夫, 2007, 「メディアとコミュニケーション」, 長谷川公一ほか(編), 『社会学』, 有斐閣, 137-169.
- 長谷正人, 2006, 「分野別研究動向(文化)——『ポストモダンの社会学』から『責任と正義の社会学』へ」, 『社会学評論』, 57-3, 615-633.
- , 2007, 「70年代テレビと自作自演」, 長谷正人・太田省一(編), 『テレビだよ! 全員集合——自作自演の1970年代』, 青弓社, 9-25.
- 橋本純一, 2002, 「序文」, 橋本純一(編), 『現代メディアスポーツ論』, 世界思想社, i-iv.
- (編), 2002, 『現代メディアスポーツ論』, 世界思想社.
- 橋本政晴, 2002, 「南信住民による長野五輪への対応——松川町のミニコミ誌『はこべ』を事例として」, 松村和則(研究代表者), 『冬季五輪後の定住条件と環境保全の社会的実証研究』, [平成11年度~13年度科学研究費補助金(基礎研究(B)(1))研究課題番号:11410041], 93-102.
- , 2002, 「メディアスポーツ研究の経緯」, 橋本純一(編), 『現代メディアスポーツ論』, 世界思想社, 25-47.
- 蓮見音彦ほか, 1993, 「座談会『21世紀日本のネオ・コミュニティの展望』」, 蓮見音彦・奥田道大(編), 『21世紀日本のネオ・コミュニティ』, 東京大学出版会, 247-278.
- 広瀬一郎, 1997, 『メディアスポーツ』, 読売新聞社.
- Horne, Tomlinson & Whannel, 1999, "Understanding Sport: An Introduction to the Sociological and Cultural Analysis of Sport", E&FN SPON.
- 飯田貴子, 2002, 「メディアスポーツとフェミニズム」, 橋本純一(編), 『現代メディアスポーツ論』, 世界思想社, 71-90.
- 今関光雄, 2003, 「メディアによって生まれる体的な個別性の関係——あるラジオ番組リスナーの『集い』について」, 『民族学研究』, 67-4, 367-387.
- 伊藤守, 2005, 『記憶・暴力・システム——メディア文化の政治学』, 法政大学出版局.
- , 2008, 「メディア相互の共振と社会の集会的沸騰——『亀田父子』問題にみる『民意』」, 『現代思想 特集=民意とは何か』, 36-1, 146-159.
- 伊藤守(編), 2002, 『メディア文化の権力作用』, せりか書房.
- 神原直幸, 2001, 『メディアスポーツの視点——疑似環境の中のスポーツと人』, 学文社.
- 北田暁大, 2001, 「歴史の政治学」, 吉見俊哉(編), 『知の教科書 カルチュラル・スタディーズ』, 講談社, 173-210.
- 松村和則, 1978, 「『地域』におけるスポーツ活動の一試論——宮城県遠田郡涌谷町洞ヶ崎地区の事例を素材として」, 体育社会学研究会(編), 『体育社会学研究 7 スポーツ政策論』, 道和書院, 65-98.
- , 1995, 「有機農業の論理と実践——『身体』のフィールドワークへの希求」, 『社会学評論』, 45-4, 437-451.
- (編), 2006, 『メガ・スポーツイベントの社会学——白いスタジアムのある風景 [改訂版]』, 南窓社.
- 松岡昌則, 1994, 「現代における農民生活の個別化とイエ・ムラ」, 『社会学年報』, 23, 21-37.
- 水越伸・吉見俊哉, 2003, 「メディア・プラクティスとは何か」, 水越伸・吉見俊哉(編), 『メディア・プラクティス——媒体を創って世界を変える』, せりか書房, 6-19.
- 森田浩之, 2007, 『スポーツニュースは怖い——刷り込まれる<日本人>』, NHK出版.
- 毛利嘉孝, 2003, 「『イラク攻撃』, 『テレビ』, そして『オーディエンス』」, 小林直毅・毛利嘉孝(編), 『テレビはどう見られてきたのか——テレビ・オーディエンスのいる風景』, せりか書房, 180-205.
- 村田周祐・松村和則, 2007, 「サステナブル・ツーリズム論における在地性への視座転換——『心の軌跡』からみた『観光』

- の再構成』、『環境情報科学』, 36-2, 32-41.
- 中江佳子, 2005, 「楽しむことへの強迫——テレビによる文化変容の一試論」, 『現代風俗学研究』, 11, 62-72.
- 中河伸俊, 1999, 『社会問題の社会学——構築主義アプローチの新展開』, 世界思想社.
- 中河伸俊・北澤毅・土井隆義(編), 2001, 『社会構築主義のスペクトラム——パースペクティブの現在と可能性』, ナカニシヤ書店.
- 小田亮, 2001, 「生活世界の植民地化に抗するために——横断性としての『民衆的なもの』再論」, 『日本常民文化紀要』, 22, 1-43.
- 鬼丸正明, 2006, 「スポーツ・グローバリゼーション・公共圏」, 高津勝・尾崎正峰(編), 『越境するスポーツ——グローバリゼーションとローカリティ』, 創文企画, 181-214.
- 大杉高司, 1998, 『『主体』への回帰は成功するか——カリブ研究の視点から』, 『人間・文化・心』, 1, 111-136.
- 佐伯啓思, 1997, 『『市民』とは誰か——戦後民主主義を問いなおす』, PHP 研究所.
- 佐藤健二・吉見俊哉・長谷正人, 2007, 『『文化の社会学』をめぐって(下)』, 『書齋の窓』, 569, 2-12.
- シルバーストーン, ロジャー/吉見俊哉・伊藤守・土橋臣吾(訳), 2003, 『なぜメディア研究か——経験・テキスト・他者』, せりか書房.
- 清水論, 2004, 『『ロゴ』の身体——カール・ルイスの登場とビジネスツールとしてのオリンピック』, 清水論(編), 『オリンピック・スタディーズ——複数の経験・複数の政治』, せりか書房, 14-31.
- 須藤春夫, 2005, 「スポーツとメディアの融合——スポーツコンテンツの問題性」, 『スポーツ社会学研究』, 13, 23-38.
- 鈴木みどり(編), 1999, 『メディア・リテラシーの現在と未来』, 世界思想社.
- トンプソン, リー, 2008, 「日本のスポーツメディアに見られる人種言説」, 『スポーツ社会学研究』, 16, 21-36.
- 若林幹夫, 2007, 「テーマ別研究動向(インターネット)」, 『社会学評論』, 57-4, 821-830.
- 渡辺潤, 1999, 「スポーツとメディア——アメリカのプロ・スポーツを中心に」, 井上俊・亀山佳明(編), 『スポーツ文化を学ぶ人のために』, 世界思想社, 57-74.
- 渡辺武達, 1995, 『メディア・トリックの社会学——テレビは「真実」を伝えているか』, 世界思想社.
- Whannel, G, 1992, “*Fields in Vision: Television Sport and Cultural Transformation*”, Routledge.
- Wilson, B. & R. Sparks, 1996, “ ‘It’ s Gotta Be the Shoes’ : Youth, Race, and Sneaker Commercials”, *Sociology of Sport Journal*, 13-4, 1996.
- 山田富秋・好井裕明(編), 1998, 『エスノメソドロジーの想像力』, せりか書房.
- 吉見俊哉, 1996, 「メディアイベント概念の諸相」, 津金澤聰廣(編), 『近代日本のメディアイベント』, 同文館, 3-30.
- , 2000, 『カルチュラル・スタディーズ』, 岩波書店.
- , 2003, 「テレビが家にやって来た——テレビの空間 テレビの時間」, 『思想 特集: テレビジョン再考』, 956, 26-48.
- , 2004, 『メディア文化論——メディアを学ぶ人のための15話』, 有斐閣.

【資料：ミニコミ誌『はこべ』に掲載された長野オリンピックをめぐる投稿一覧(1989年～2008年)】

- No.153('89.12) <1>「オリンピック」より「小さな平和」を
- No.154('90.1) <2>誰が為にオリンピックはある <3>松川町民がなぜ長野オリンピックに協力して税金を使わせられるのか
- No.156('90.3) <4>オリンピックへの疑問 <5>岩菅山を視察して <6>岩菅山取材に参加して <7>裏岩菅山取材記 <8>どうぞ正しい認識を!!岩菅山 Q&A <9>オリンピックと自然保護アンケート
- No.172('91.7) <10>冬季五輪開催決定に当たっての所感
- No.173('91.8) <11>暗い影を落としたオリンピック <12>オリンピックに思う <13>「長野冬季オリンピック」私の考え <14>高畑山の仙人 <15>冬季オリンピックの長野県開催決定を在名県人として憂える <16>「長野決定」その後

- <17>オリンピック招致狂騒顛末記 <18>長野冬季五輪の行くえ <19>なぜオリンピックなのか <20>いい感じ「ナガノ」 <21>オリンピックについて <22>私の耳がきいたオリンピックの話 <23>なるべく自然と共存を <24>オリンピックと自然破壊 <25>自然と地域を破壊する「長野五輪」を返上しよう! <26>私の中のオリンピック <27>バーミンガムへ行ってきました <28>シティ・オブ・ナガノ
- No.174('91.9) <29>豊かな自然があればこそ <30>監視の目 <31>名古屋—長野県人会だよりから
- No.175('91.10) <32>長野冬季オリンピック招致に関する公開質問状
- No.178('92.1) <33>しんと雪の降る夜, おかあちゃんは「オリンピック」と「冬の下痢」について考えていた
- No.182('92.5) <34>冬季五輪施設整備についての市長の基本的態度について
- No.183('92.6) <35>冬季五輪施設についての答弁(承前)
- No.184('92.7) <36>『長野オリンピックの馬鹿馬鹿しさ②』
- No.185('92.8) <37>冬季五輪招致費 19 億円うち 6 億円(県費)の謎を追って①
- No.187('92.10) <38>冬季五輪招致費 19 億円うち 6 億円(県費)の謎を追って②
- No.190('93.1) <39>冬季五輪招致費 19 億円うち 6 億円(県費)の謎を追って③
- No.192('93.3) <40>冬季五輪招致費 19 億円うち 6 億円(県費)の謎を追って④
- No.195('93.6) <41>冬季五輪招致費 19 億円うち 6 億円(県費)の謎を追って⑤
- No.197('93.8) <42>パラリンピック冬季競技大会の招致について
- No.204('94.3) <43>冬季五輪招致費二十五億円うち九億二千万円(県費)の謎
- No.205('94.4) <44>スポーツ競技者からみたオリンピック批判をきいて <45>オリンピックをみつめる会で「江沢さんの話」を聞いて <46>長野冬季五輪は税金のむだ使い
- No.206('94.5) <47>オリンピックをみつめているひとびと①
- No.207('94.6) <48>オリンピックをみつめているひとびと② <49>長野五輪程バカ気たイベントは無い <50>代理人の代理人
- No.208('94.7) <51>オリンピックをみつめているひとびと③
- No.209('94.8) <52>オリンピック——えっ, 反対派は無関心派? <53>オリンピックをみつめているひとびと④
- No.210('94.9) <54>オリンピックをみつめているひとびと⑤
- No.211('94.10) <55>長野冬季五輪「帳簿処分」問題と「選手団渡航費丸抱え」の件について
- No.212('94.11) <56>オリンピック施設についての請願 <57>猪谷千春 IOC 委員の五輪 kongress 発言 <58>猪谷千春氏 (IOC 委員) のスピーチの要約 <59>オリンピックについて
- No.214('95.1) <60>オリンピックとドーピング <61>オリンピックって何ですか
- No.215('95.2) <62>長野冬季五輪・北陸新幹線施設工事中止についての緊急アピール
- No.216('95.3) <63>なぜ運動会じゃだめなの
- No.218('95.5) <64>長野五輪招致委員会の会計帳簿 <65>ナガノ五輪のこと知ってますか
- No.230('96.5) <66>長野冬季五輪外国選手の渡航費負担問題について——五輪招致運動の本質に迫るもの
- No.248('97.11) <67>長野投機誤輪
- No.250('98.1) <68>長野冬季オリンピックに思う <69>ま, いいけど <70>いいとは思えないのです <71>長野冬季オリンピックの成功を祈って <72>借金つくらんといて <73>長野投機誤輪 <74>オリンピックをもっと知ろう
- No.251('98.2) <75>冬季オリンピックの巨漢に注目しよう
- No.253('98.4) <76>終わってみれば……——歴史の一大事、長野冬季五輪
- No.264('99.3) <77>長野投棄汚輪ピック

(2008年5月15日 受理)